言語文化「徒然草・枕草子」

6時間扱い

単元の目標

◎他の文学作品と比較し、それぞれの作品のコンセプトをとらえることができる。
〇主語・述語の関係を意識しながら、文末表現を的確に解釈できる。

評価規準

知識・技能	伝統的な言語文化(ウ) 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古文特有の表現について理解すること。
思考・判断・表現	読むこと(エ) 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。
主体的に学習に取り組む態度	古典の世界に親しむために、古典を読むための知識や表現に対する理解につとめ、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めようとしている。

知識・技能	文中の主語や述語をとらえながら、文末の助動詞や助詞などの役割について適切に理解し、解釈に活かすことができる。
思考・判断・表現	「枕草子」との比較を行い、枕草子と徒然草それぞれの共通点、相違点をつかみとり、作品比較を行うことで、作品としての意義をとらえる。

単元の流れ

次	時	主な学習活動
一	1	作品が成立した時代背景についてまとめなおす。
二	2	徒然草「亀山殿の御池に」を通して、徒然草の基本的な構成を理解する。
	3	徒然草「高名の木登り」を通して、徒然草の基本的な構成を理解する。
三	4	枕草子「春はあけぼの」を読み、枕草子の構成について知る。
	5	枕草子「うつくしきもの」を通して、枕草子の基本的な構成を理解する。
四	6	徒然草と枕草子の共通点と相違点について論述をする。

授業づくりのポイント

単元で育てたい資質能力

本単元のねらいは、複数の古典作品を通して、それぞれの共通点・相違点について発見する活動を通して、比較検討する力を育むことにある。古典作品を一つずつ丁寧に読むという活動を中学校までで終えた生徒たちにとって、複数の作品を、時代を超えて比較するという経験は、それまでの学習と異なる印象を持つ。俯瞰的な視点を持つことは現代文の文章理解にも通じるものである。

具体例
徒然草は結局のところ「説教」になるため、別のことわざや故事成語に置き換えが可能である。対して枕草子は(少なくとももものづくしにおいては)実例が挙げられるに留まっているので、意見は読み取りづらい。とはいえ、その個別から共通する条件を見つけ出すことで、清少納言の価値観に迫ることはできる。

教材・素材の特徴

徒然草は鎌倉時代末期に成立した随筆であり、同時代の方丈記、そして平安時代の枕草子と並んで三大随筆と称される。随筆は特に、作者の価値観が力強く押し出る傾向があるので、物語や日記と比べても、作者の持つ価値付けが見出しやすい。枕草子は描かれる内容によって異なる場合もあるが、今回はものづくしに焦点をあてて、清少納言の価値判断に迫れればいいと考えている。

具体例
徒然草は置き換えがしやすい。例えば「餅は餅屋」「油断大敵」など、「つまり一言で言えば」というまとめがしやすい。逆に言えば、教師側が安易に一言でまとめようとするのは、生徒が自らでまとめようとする機会を奪うことになる。そこに留意したい。対して枕草子は、「うつくしきもの」「にくきもの」がそうであるように、清少納言にとってのかわいらしいものとは、イライラするものとは、という条件が見えてくる。

言語活動の工夫

シンキングツールのベン図を用いて、二つの作品の共通点・相違点をキーワードでまとめてもらうといった活動は、どのようなクラスであっても可能であろう。特に今回は両作品の授業を終えてからの活動なので、生徒も作品ごとの特徴や要点をまとめやすい段階になっていると思われる。逆に言えば、そこで何も出てこないということは、生徒は数時間の授業を通しても、何もその作品そのものについては学んでいない、ということの証左である。
もし特徴のピックアップ化がうまくいかない生徒に対しては、先生が個別にまわりながら、特徴を振り返らせるという活動が必要であろう。そのためにも、授業内で使われるプリントやノートは、振り返るに値する内容になっていなければならない。そうでないと、生徒が自らで振り返り、自らでつかむということができない。

随筆（3／6）

本時の目標

①主語や会話主に着目して物語を理解することができる。
②作品のエピソードと作者の意見とを連関させて理解できる。

本時の具体的評価づけ

①作中の会話主と動作主を適宜、把握している。
②第2段落の作者の「蹴鞠」の位置づけを理解している。

授業の流れ

1 第1段落の物語展開を理解する。（25分）

ケース❶
T ：古文は、主語を省略するパターンが多くあります。
T ：では、プリントにしるしがついている五カ所それぞれの主語は誰でしょう。
T ：「軒丈ばかり」とありますが、位置は高いのでしょうか、低いのでしょうか。
T ：「かばかり」とありますが、「これぐらい」とは、どれぐらいを指すのでしょうか。

古文や漢文の物語展開の指導は、多くの場合が緩慢なものになりがちである。
特に逐語訳をはさんでいくと、その退屈さは極まる。大事なポイントは
①音読をなるだけ大事にして、適度なスピード・適度なピッチで読ませる。
②口頭訳で理解するものと、重点訳を行って理解するものを明確に分ける。
③生徒がイメージしにくい箇所（木登り・軒丈など）は教師が適宜補足する。

ケース❷
T ：「いかにかく言ふぞ」の会話主はだれでしょう。
S1：え、「人」（ここでは「弟子」と補足している）かな。
T ：「人」って、いまどこにいるんだっけ。（ここで黒板に図示しておく）
S2：弟子が師匠にこれを聞くって変だよね。

それぞれの位置を把握すると、問うたのが「人」ではないことが妥当になる。
とすると、「第三者」の存在が必要となるわけだが、
ここはそこほどに引っ張るところでもないので、
もし文法事項をおさめたいのならば「けり」と「き」の違いを示せるし、
そうでなくても、じゃぁ誰があり得るのか、という問いも有効だと思う。

随筆（3／6）

2 第2段落の「蹴鞠」の話題と、第1段落の話題との共通点を論述する。（20分）

ケース❶
T ：最後の二行は何を話題に挙げていますか？
S1：蹴鞠、かなあ？
T ：そうですね、蹴鞠が話題にあがっていますね。
T ：どうして、蹴鞠がとりあげられたのでしょうか。
S1：どうしてって、どういうこと。
T ：だって庭師の話をしていたのに。いきなり蹴鞠の話ですよね。
S2：なにか共通点があったから？
T ：この二つの話題には、どんな共通点があるんでしょうか。

この「高名の木登り」は、第1段落での庭師の最後のセリフが、そのまま兼好法師の言いたいこと、意見につながっている。ゆえに兼好法師は、第2段落で直接意見を述べず、「あやしき下郎といへども・・・」と結んでいる。そして最後の蹴鞠の話。これは、「話題→意見→他の話題」という構成になっていることに留意させる。
この構成の意図は、言うまでもなく、読み手に納得感を得るためである。そのために、読み手が連想をしやすい「蹴鞠」を取りあげたのだ。

700年が経過する作品においても、やはり現在の「論理的な文章」に通じる構成になっていること、そして今も昔もあまり人は変わらない性質を持っているということ、この二点が伝われば徒然草の学習は成ったと言って良いと思う。

T ：それでは100字程度で本文の構成を論述してみましょう。

この「構成」を論述するという活動は、現代文においても有効な手段となる。
書き出す糸口を、教師の方から援助してほしい。（援助の方略は後述する）

0 画像や映像を使って想像力を高める

古典は学習段階初期であればあるほど、古文の世界そのものがイメージしづらいので、適宜資料集の画像やもし可能ならば動画などを使い、学習する側の頭の中に平安時代や鎌倉時代の様子がイメージできるように工夫を行う。また、古典の舞台となる時代の常識、古典常識も非常に重要な学習項目となる。その際には、テレビ番組やネットコンテンツなどを活用して、生徒に入り込みやすいものを、ワンポイント教材として扱うのがよい。おすすめとしては、NHK for Schoolや教師が選別したうえでのYouTube映像がある。
ただし、映像はあくまでワンポイントにおさめることと、その古典常識が、生徒たちが実際に暮らしている「今」とリンクすることの二点は留意しておきたい。ただたんにトリビアを語るような構成で古典常識を語るのは好ましくない。

古文・随筆
「徒然草」
高名の木登り

設問プリント

担当：福永

1. 本文を読む

①高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、
②梢を切らせしに、いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、
③下るる時に、軒丈ばかりになりて、
④「過ちすな。心して下りよ。」
⑤　と言葉をかけ侍りしを、
⑥「かばかりになりては、飛び下るとも、下りなん。
⑦　いかに、かく言ふぞ。」と申し侍りしかば、
⑧「そのことに候ふ。目くるめき、枝危うきほどは、
⑨　おのれが恐れ侍れば、申さず。過ちは、安きところになりて、
⑩　必ず仕まつることに候ふ。」と言ふ。
⑪あやしき下郎なれども、聖人の戒めにかなへり。
⑫毬も、難きところを蹴出だして後、安く思へば、
⑬必ず落つと侍るやらん。

2. 話の流れを読み解く『高名の木登り』①

①高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、
②梢を切らせしに、いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、
③下るる時に、軒丈ばかりになりて、
④「過ちすな。心して下りよ。」
⑤　と言葉をかけ侍りしを、

問1　①『高き木に登せて、』とあるが、
①主語は誰か。【理解】　【　　】
②対象は誰か。【理解】　【　　】

問2　④『過ちすな。心して下りよ。』について
①会話主は誰か。【理解】　【　　】
②対象は誰か。【理解】　【　　】
③どういう内容か。口語訳せよ。【解釈】
【　　】
④どのような時に言ったのか。文中から十文字程度で抜き出せ。
【　　】

単語紹介(★は重要単語)
【1】掟つ　命じる
【2】★いと　とても
【3】軒丈　家の屋根
【4】★侍り　～です／～ます

2. 話の流れを読み解く『高名の木登り』②

⑥「かばかりになりては、飛び下るとも、下りなん。

⑦ いかに、かく言ふぞ。」と申し侍りしかば、

⑧「そのことに候ふ。目くるめき、枝危うきほどは、

⑨ おのれが恐れ侍れば、申さず。過ちは、安きところになりて、

⑩ 必ず仕まつることに候ふ。」と言ふ。

問3 ⑥『かばかり』について

①口語訳せよ。【解釈】【　　】

②示す内容を文中から六字で抜き出せ。【理解＆抜出】

【　　】

問4 ⑦『いかに、かく言ふぞ。』について

①口語訳せよ。【解釈】【　　】

②『かく』の指す内容を文中から抜き出せ。【理解＆抜出】

【　　】

問5 ⑧『そのことに候ふ』を口語訳せよ。【解釈】

【　　】

単語紹介(★は重要単語)

【5】★か　かく　　これ　このよう

【6】★いかに　　どうして　どのように

【7】★申す　　申し上げる

【8】★候ふ　　です　ます　ございます

2. 話の流れを読み解く『高名の木登り』②

⑪あやしき下郎なれども、聖人の戒めにかなへり。
⑫毬も、難きところを蹴出だして後、安く思へば、
⑬必ず落つと侍るやらん。

問6　⑪『あやしき下郎』について
①「あやし」の意味を二つ書け。【解釈】【　　】
②文中では誰を指すか、抜き出せ。【理解＆抜出】
【　　】
問7　⑫と⑬について答えよ。
①なぜここで毬の話が出てきたのか。意図を答えよ。【意図】
【　　】
問5　⑪～⑬までの文の役割は何か。【意図】
【　　】

単語紹介(★は重要単語)
【5】★かく　　これ　このよう
【6】★いかに　　どうして　どのように
【7】★申す　　申し上げる
【8】★候ふ　　です　ます　ございます